

琉球先島方言のアクセント体系・再考

崎村弘文*

A New View on the Accentual System of the Japanese Dialects in Ryukyu Sakishima Islands

Hirofumi SAKIMURA*

Abstract

This paper attempts to show that the Japanese dialects in Ryukyu Sakishima Islands are tone-languages which have one to three types of pitch-patterns on their prosodical unit — word or word + *suffix* — similar to the dialects in west the Kyushu, and are not pitch-accent languages like Tokyo-dialect as they have been generally regarded.

0. はじめに

0-1 琉球諸方言の〈語句アクセント〉は、従来考えられていたのとは異なり、いわゆる〈n型体系〉を持つものと思われる。

このことについて筆者は、国語学会1982年度秋季大会において発表し、また、「鹿児島大学文科報告」18号(1982)の拙稿において、琉球諸方言の東部分派の一つ・徳之島方言を例に詳しく論じたことが有る。

ここでは、それに続く試みとして、同西部分派に属する先島方言=宮古・八重山の諸方言=を取り上げ、それらの〈語句アクセント〉がやはり〈n型体系〉を持つことを、具さに検証してみたいと思うのである。

0-2 検証に当って、下記の調査報告①②を手がかりとし、また、③以下の論考を参照することとした。

- ①平山輝男・中本正智『琉球与那国方言の研究』(1964)
- ②平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球先島方言の総合的研究』(1967)
- ③金田一春彦「アクセントから見た琉球諸方言の系統」(「東京外国語大学論集」7・1960)
- ④平山輝男「琉球先島方言のアクセント体系」(「国語学」67・1966)
- ⑤平山輝男・大島一郎・中本正智『琉球方言の総合的研究』(1966)
- ⑥柴田武監修『全国方言資料10~11・琉球編I~II』(1972)

*崎村弘文、鹿児島大学教養部文学研究室

Laboratory of Literature, College of Liberal Arts, Kagoshima University, 21-30, Korimoto 1-Chome, Kagoshima 890, JAPAN

⑦中本正智『琉球方言音韻の研究』(1976)

1. 検証

1-1 以下、区別される型の数 n が大の方言から順に検証を加えるが、その際、次のような手順によるものとする。即ち、各方言について、

(イ)まず、従来の見方を、報告①②所載の〈アクセント体系表〉により示し、

(ロ)次に、筆者の解釈と、それを支える事実認識=主に、語句の〈音形〉と調値との関係に
関わる=とを示す。

(なお、各方言の行なわれている地点については、次頁地図1参照。該地図は、琉球諸方言における2拍名詞の調類区別の様相を示すため作成したもので、表中の3・2a・2b・2cは各々、次のことを示す。

3 : それを付された方言が2拍名詞について3種の調類=名義抄式アクセントの1・2類
/3類/4・5類=を区別すること。

2a: " " " 2種の調類=同1・2・3類/4・5類=を
区別すること。

2b: " " " " =同1・2類/3・4・5類=を
区別すること。

2c: " " " " =同1・2・4・5類/3類=を
区別すること。

以下に述べる n 型アクセント方言の場合、如上の3・2等は、そのまま、その方言の全ての語句について認められる調類数=即ち n_i=に該当する。

1-2 与那国方言

1-2-1 沖縄県八重山郡与那国町祖納方言(3型)

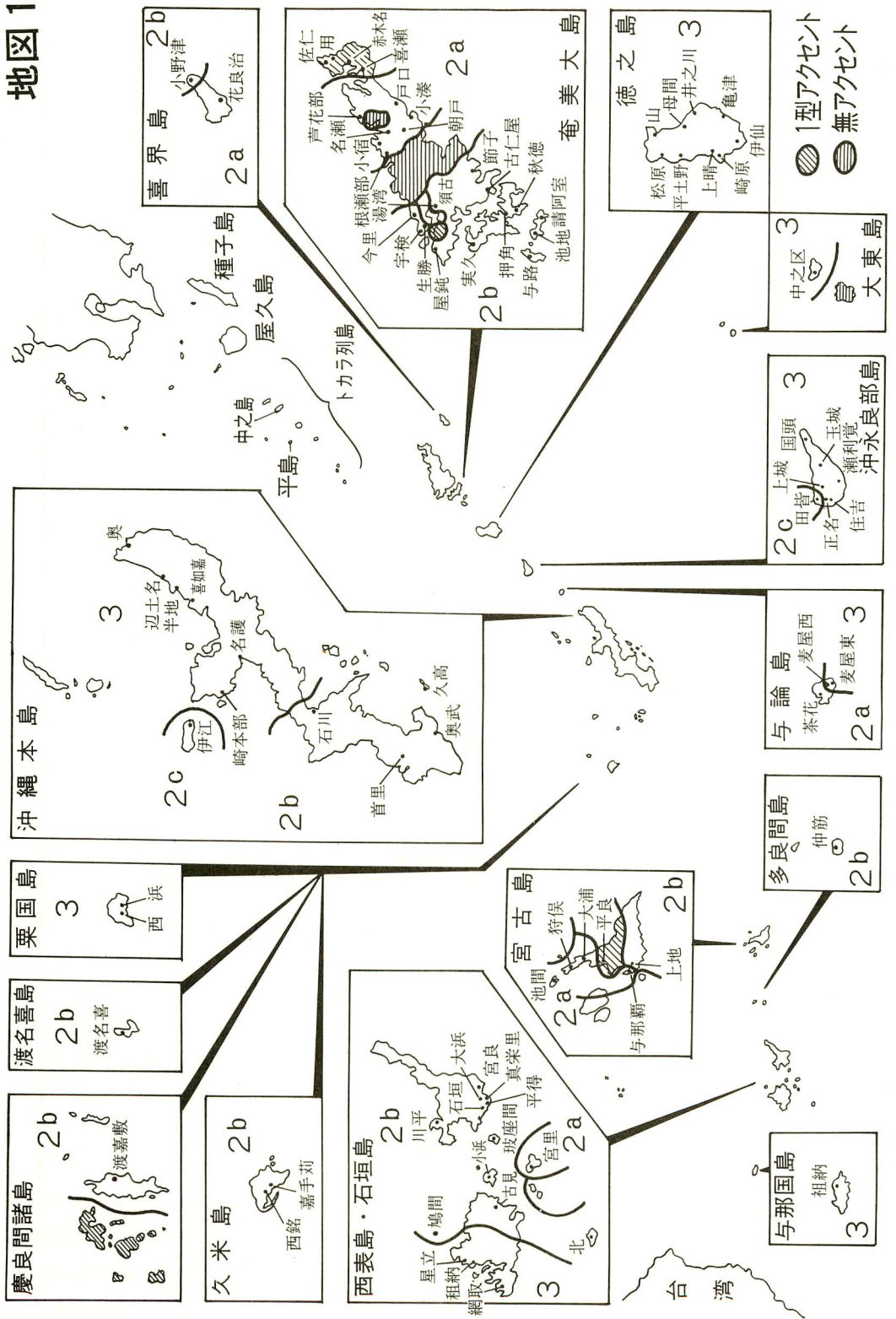
与那国祖納方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例
2	○●	/ - 〇〇 /	ʔijū (魚), sagī (酒), bup _x (居る)
	●●		
	〇〇		
3	○●	/ - 〇〇〇 /	ʔagūi (欠伸), maguō (巻く), biŋga (男)
	●●		
	〇〇〇		
	○●●		
4	○●●	/ - 〇〇〇〇 /	hanaburu (鼻), ninsao (遅い)
	●●●		
	〇〇〇〇		
	○●●●		
4	●●●●	/ - 〇〇〇〇 /	ʔanampu (穴), ʔamaruo (余る)
	○●●●		
4	●●●●	/ - 〇〇〇〇 /	nanadu: (七十), tʔiŋdu: (四十)
	○●●●		

この方言のアクセント体系についての解釈は、左表の如くで適当と思われる。

即ち、モーラを分節単位として分析し、}で括った複数の調値は互いに条件異調値の関係に在るものとして1調類にまとめ、この方言には「語句の長さに関わりなく3種の調類=高・低・降=が認められる」と考えるわけで

地図1



ある（ } で括った調値のうち下方のものは、第2モーラに調値の上がりめを担にくいモーラ=撥音・単独の母音等。表中、×を付して示す=を持つ語が取るもので、通時的観点からは、上方の調値へ移行する一歩手前の段階に在るものと扱えられる）。

なお、これと名義抄式アクセントとを比較した場合、次のような調類の対応が認められる。

「高」類：1拍名詞1・2類, 2拍名詞1・2類, 3拍名詞形類ほか；動詞1類；形容詞1類

「低」類：1拍名詞3類, 2拍名詞3類, 同4・5類の一部, 3拍名詞の一部；動詞2類

「降」類：2拍名詞4・5類, 3拍名詞の一部；形容詞2類

※2拍名詞4・5類相当語の一部が同3類相当語と調値・調類を同じくする事実は、この方言に限らず、琉球諸方言にかなり普遍的に認められる。

※2拍名詞4・5類相当語のごく一部・3拍名詞相当語のごく一部=「簾」「盥」等=は、語末から第二番めの拍が高い調値●○○・○○○を取るが、これは、語末の拍が撥音・単独の母音等<独立性の乏しい>もので、調値の下がりめ●を担にくいことによるものと思われる（即ち、それらは、○●・○●●等と条件異調値の関係に在るものと見なされる）。形容詞2類相当語が○●○・○●●○の調値を取るのも同様の理由によるものと思われる。したがって、上記対応表では、形容詞2類を「降」類の項に示した。

※各類の名詞には、主格の助詞〔ŋa〕が-●▶・-○▷・-●▶の如く付く（ただし、通常の発話では、付かないのが通例）。

※ちなみに、1拍名詞相当語は、いずれも引いて2拍に発音する。

1-3 石垣方言

1-3-1 八重山郡竹富町租納方言（^{ソナイ}3型から2型へ移行しつつある）

西表租納方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例	調 値
2	○○	/○○/	ʔu ₁ i (牛), bu (居る)	○○ { ●○ ○●
	●○	/○ [×] ○/	ʔu ₁ i (白), ʔa ₁ (網・有る), so ₁ (竿)	
	○●	/○○ ^γ /	pa ₁ na (花), ʔudi (腕), muku (婿)	
3	○○○	/○○○/	kibu ₁ i (煙), sa ₁ ku (咲く)	同 左
	○●○	/○○ ^γ ○/	kugani (黄金), sa ₁ ku (裂く), mi ₁ sa ₁ (良い)	
	●○○		mi ₁ nt ₁ i (目), mja ₁ (無い)	
	○○●	/○○○ ^γ /	fu ₁ i ₁ ri (薬), mo ₁ ra (枕)	
4	○○○○	/○○○○/	manantsa (組板), ʔa ₁ i ₁ pu (遊ぶ)	同 左
	○○●○	/○○○ ^γ ○/	fu ₁ mimunu (履物), ʔamaru (余る),	
	○●○○		ʔa ₁ i ₁ tsa ₁ (厚い・暑い), mi ₁ mi ₁ nt ₁ i (みみず)	
	○○○●	/○○○○ ^γ /	ʔinat ₁ i ₁ ki (杵), ka ₁ ra ₁ ka ₁ (燗瓶)	

モーラを分節単位として分析する。

○●○の調値は、いずれも、2拍名詞3・4・5類相当語に認められるもので、互いに同一調類の条件異調値の関係に在るものと見なされる（後者●○は、3・4・5類相当語のうち第2モーラに調値の上がりめを担にくいモーラ=撥音・単独の母音等、表中、×を付して示す=を持つものが取る調値、前者○●は、それ以外のものが取る調値、と規定される）。したがって、この方言では、2モーラ語の調類は2種認められるのみということになる。

3 モーラ語・4 モーラ語については、基本的に低・降・昇の3 調類を認めるのが適当と思われるが、うち、名詞に関しては、助詞が付いた場合、「降」類のものが「昇」類のものと調値を同じくする傾向が有り、2 型化への動きが窺われる（下記参照）。

- | | |
|--|--|
| <p>中高型 (○●○)</p> <p>kugani, kuganidu ʔaru (黄金, ~がある)</p> <p>kuganindu ʔaru (黄金がある)</p> <p>また, kuganindu ʔaru (黄金がある)</p> <p>miduɔ, midundu bu: (女, ~がいる)</p> <p>また, midundu bu: (女がいる)</p> <p>中高型 (○○●○), (○●○○)</p> <p>Fuɣimunu, Fumimundu ʔaru (履物, ~がある)</p> <p>Fumimundu ʔaru (履物がある)</p> <p>また, Fuɣimundu ʔaru</p> <p>Fumimundu ʔaru</p> <p>mimintʃi, mimintʃidu bu: (みみず, ~がいる)</p> <p>mimintʃidu bu: (みみずがいる)</p> <p>また, mimintʃidu bu:</p> <p>mimintʃidu bu:</p> | <p>尾高型 (○○●, ○○○▶, ○○○▶▶)</p> <p>Fuɣiri, Fuɣiridu ʔaru (葉, ~がある)</p> <p>Fuɣirindu ʔaru (葉がある)</p> <p>na:da, na:dandu ʔidiru (涙, ~が出る)</p> <p>尾高型 (○○○●, ○○○○▶, ○○○○▶▶)</p> <p>ʔinatʃiki, ʔinatʃikidu ʔaru (杵, ~がある)</p> <p>ʔinatʃikindu ʔaru (杵がある)</p> <p>kaɾakara, kaɾakaraɗu ʔaru (一種の酒の爛瓶, ~がある)</p> |
|--|--|

1 - 3 - 2 八重山郡竹富町宮里方言 (2 型)

黒島方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例	調 値
2	○●	/○○/	ʔuʔi (牛), ʔap _x (網), buɔ _x (居る)	{ 同左
	●○	/○ ^ˊ ○/	ʔuʔi (白), ʔap _x (有る)	
3	○●●	/○○○/	kibuʔi (煙), makuɔ (巻く), ne:ɔ (似る)	{ 同左
	○●○	/○○ ^ˊ ○/	garaʃi (鳥), makuɔ (蒔く), haɾa (瓦), nuɔ _x (縫う)	
4	○●●●	/○○○○/	bikidumu (男), fuɾaɾ (二人), narabuɔ (並ぶ), guɾaɔ (重い)	{ 同左
	○●○○	/○○ ^ˊ ○○/	ʔamaruɔ (余る), takahaɔ (高い), haŋgaɾ (鏡)	
	○●●○	/○○○ ^ˊ ○/	numehɔ (飲んだ), mi:madʒi (みみず)	

※表中, ×を付したのは, 調値の上がりめ or 下がりめを担いにくいモーラ。

モーラを分節単位として分析し, |で括られた複数の調値を「アクセント変化に伴う, 1 調類の調値のゆれ」と見なし, 昇・降の2 調類を認める。

この方言では, 現在, ●●→○●-ならびに-●○○→●●○のアクセント変化が進みつつあるものようである (後者の変化は, モーラ数4 以上の語にのみ認められる。下記参照)。

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| ʔuʔi, ʔuʔinu ʔav (白, ~がある) | ʔoggi, ʔogginu ʔav (扇, ~がある) |
| ʔuʔinudu ʔar (白はある) | ʔogginudu ʔar (扇はある) |
| sar, sannu buɔ (猿, ~がいる) ↓ | makuɔ, makehɔ (蒔く, 蒔いた) |

?usaŋgi, ?usaŋginudu bura (兎, ~がいる)
 ?usaŋginu mi: (兎の目)
 ?u:naī, ?u:nainudu bura (鰻, ~がいる)
 mi:jad3ī, mi:jad3inudu bura (みみず, ~がいる)
 so:ḁ [so:ḁ], saiçitta: (裂く, 裂いた)
 mo:ḁ [mo:ḁ], maiçitta: (蒔く, 蒔いた)
 taramuḁ, taramiçitta (頼む, 頼んだ)
 sukuruḁ, sukuriçitta (作る, 作った)

?akasaḁ (赤い) ?asasaḁ (浅い) …… 1類
 ta:saḁ (高い) fu:kasaḁ (深い) …… 2類
 のような形ではアクセントが同一型(○○○●)に
 統合しているが,
 ?akasaḁ (赤い) ?asasaḁ (浅い) ……
 低平型 (○○○◎)
 ta:saḁ (高い) fu:kasaḁ (深い) ……
 中高型 (○●○○◎)

のような形では明瞭な区別がある。

連体形でも

?akasaruhana (赤い花)
 ?asasaruka: (浅い井戸)
 ta:sarujama (高い山)
 fu:kasaruka: (深い井戸)

語幹+saの形でも

?akasa (赤さ) ?asasa (浅さ) ……
 低平型 (○○○)
 ta:sa (高さ) fu:kasa (深さ) ……
 尾高型 (○○●)

のように1類と2類との間に明瞭な型の区別がある。

1-3-4 八重山郡竹富町北方言(2型)

波照間方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例
2	○○ ○●	/○○/ /○○ʔ/	?usi (牛), buḁ (居る) ?usi (白), ?aḁ (有る)
3	○○○ ○○●	/○○○/ /○○○ʔ/	katsu: (鱧), saguḁ (咲く) midumu (女), sa:kuḁ (裂く)
4	○○○○ } ◎○○◎ } ○○○●	/○○○○/ /○○○○ʔ/	fu:ta:tsu (二つ), ?atsahaḁ (厚い) kurjo:ḁ (暦), ?atsahaḁ (暑い)
5	○○○○○ } ◎○○◎◎ } ○○○○●	/○○○○○/ /○○○○○ʔ/	narabiruḁ (並べる), tu:saḁ (違い) nagariruḁ (流れる)

モーラを分節単位として分析し、低・昇の2調類を認める。

◎○○◎・◎○○◎◎は、形容詞1類相当語が取る調値である。それらの語は、何らかの理由で名詞や動詞1類よりもアクセント変化に従うのが遅かったため、かつての様相(○)○○●●を色濃く伝えるとともに、2類相当語との区別をより確かにするために、他に先がけて●○○○(○)の調値を取ろうとしているものと思われる。

1-3-5 八重山郡竹富町小浜方言 (2型)

小浜方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例	調 値
2	●○	/○ ○/	ʔus _x (牛), hō (為る)	{ 同左
	○● ●●	/○○ʔ/	muk _x (婿), ʔus _x (白), ku _x (来る)	
3	●○○	/○ʔ○○/	ʔak _x upi (欠伸), mak _x u (巻く)	{ ●○○ ○●○ 同左
	○●○	/○○ʔ○/	hanats _x i (鼻血)	
	○○● ○○●●	/○○○ʔ/	fuk _x uru (袋), garas _x u (烏)	
4	●○○○	/○ʔ○○○/	kung _x ani (黄金), ʔakah _x ao (赤い)	{ ●○○○ ●○●○ ○●○○ 同左
	●○●○	/○○ʔ○○/	karir _x u (枯れる)	
	○○○●	/○○○○ʔ/	mako:ra (枕), ʔaruk _x u (歩く),	
	○○●●		tso:ha _x (強い)	

※表中, ×を付したのは, 調値の上がりめ or 下がりめを担いにくいモーラ。

モーラを分節単位として分析し、}で括られた複数の調値を「アクセント変化に伴う、1 調類の調値のゆれ」と見なし、降・昇の2 調類を認める。

この方言では、現在、●○→○●-ならびに-●●→○●のアクセント変化が進みつつあるようである(●○-・○●-は、ともに、3 拍名詞形・小豆・二十歳類相当語、同頭類相当語の一部; 動詞1 類相当語がこれを取り、-●●-・○●は、ともに、3 拍名詞頭類相当語の大部分、同命・兎・兜類相当語; 動詞2 類相当語がこれを取る。なお、●○○○・●○●●は、各々、3 拍形容詞1 類相当語の大部分・同2 類相当語の大部分が取る調値であるが、見ての如く両者の音声学的実質はほぼ同一であり、調値の混同→調類区別の喪失が起きつつあることを窺わせる)。

1-3-6 石垣市宮良方言 (2型)

宮良方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例	調 値
2	●○	/○ʔ○/	ʔus _i (牛), f _u (為る)	{ 同左
	○○	/○○/	ʔus _i (白), ku (来る)	
3	●○○	/○ʔ○○/	ʔak _u bi (欠伸), mak _u (巻く)	{ ●○○ ○●○ 同左
	○●○	/○○ʔ○/	f _u tai (額), f _u mu (汲む)	
	○○○	/○○○/	takara (宝), sa _k u (裂く)	
4	●○○○	/○ʔ○○○/	b _a daru (渡る), ʔakah _{ao} (赤い)	{ ●○○○ ○●○○ 同左
	○●○○	/○○ʔ○○/	bi _g id _u (男), ʔasab _u (遊ぶ)	
	○○○○	/○○○○/	mi:du (女), ʔamar _u (余る)	

モーラを分節単位として分析し、}で括られた二つの調値を「アクセント変化に伴う、1 調類の調値のゆれ」と見なし、降・低の2 調類を認める。

この方言では、現在、●○→○●-のアクセント変化が進みつつあるようである(●○○・○●○○は、ともに、3 拍名詞形・小豆・二十歳類相当語; 2 拍動詞1 類相当語がこれを取り、●○○○・○●○○は、ともに、3 拍動詞1 類相当語がこれを取る)。

1-3-7 石垣市石垣方言(2型)

石垣方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例
2	●○	/○ ^ˊ ○/	ʔusī (牛), ʔud (居る), fut̚su (口)
	○●		
	○○		
3	●●○	/○○ ^ˊ ○/	katsu: (鰹), kibusi (煙), makud (巻く), tsjikara (力)
	○●○		
	○○○		
4	●●○○	/○○ ^ˊ ○○/	panatsi: (鼻血), fut̚ari (二人), fukuri (腫れる)
	○●○○		
	○○○○		
5	●●○○○	/○○ ^ˊ ○○○/	ʔattsad (厚い), ʔutagaud (疑う)
	○●○○○		
	○○○○○		

この方言のアクセント体系についての解釈は、上表の如くでほぼ適当と思われる。(モーラを分節単位として分析し、降・低の2調類を認める)。

この方言では、現在、●●→○● (●○→○●) のアクセント変化が進みつつあるようで、その際、第1モーラに無声化母音=表中、×を付して示す=を抱える語ほど、変化に従う傾向が強いようである。}で括られた二つの調値は、第1モーラの性質の相違により生ずる条件異調値と見なすのが適当と思われる。

1-3-8 石垣市大浜方言(2型)

大浜方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例
2	●○	/○ ^ˊ ○/	ʔusī (牛), ʔud (居る), fut̚su (口)
	○●		
	○○		
3	●○○	/○○ ^ˊ ○/	katsu: (鰹), makud (巻く), sukud (聞く)
	○●○		
	○○○		
4	●○○○	/○○ ^ˊ ○○○/	bigidud (男), ʔattsad (厚い), fut̚adzi (二つ)
	○●○○		
	○○○○		

この方言のアクセント体系は、報告②にも云う如く、基本的に(生成アクセント論的に)上記石垣方言と同一の性格を持つものである。モーラを分節単位として分析し、}で括られた二つの調値を「第1モーラの性質の相違による条件異調値」として1調類にまとめ、降・低の2調類を認めれば良い。

1-4 宮古方言

1-4-1 宮古郡多良間村仲筋方言 (2型)

多良間仲筋方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語例
2	○○ ●● } ○● }	/○○/ /○'○/	ʔusī (牛), buł (居る) pana (花), ʔusī (白), ʔał (有る), tšĩki (月)
3	○○○ ○●○ } ●●○ }	/○○○/ /○○'○/	katʃu: (鯉), ʔasĩbi (遊ぶ) garaʃa (鳥), ʔamał (余る), ka:ra (瓦), ʔa'ki (歩く)
4	○○○○ ○●○○ } ●●○○ } △○○●○○ } x○○●○○ }	/○○○○/ /○○'○○/ /○○○○'○/	panatsĩ: (鼻血), bikidum (男) ʃaugatsĩ (正月), ʃandʒu: (三十) kũkunutsĩ (九つ), pa:nudu (歯が)
5	○○○○○ ○●○○○ } ●●○○○ } x○○●○○○ } △○○●○○○ }	/○○○○○/ /○○'○○○/ /○○○○'○/	fũtaigam (額), ʔakaʃa:ł (赤い) takaʃa:ł (高い), tʃu:ʃa:ł (強い) fũkurunudu (袋が), ki:nunał (木の实)

※語例の欄でxを付したのは、調値の上がり目 or 下がり目を担いにくいモーラ。

モーラを分節単位として分析し、次のような考え方に基づいて、低・降の2調類を認める。
○xを付した調値●●●○・○●●●○は、いずれも自立語+付属語のそれであり、自立語調値を示す表からは除くべきものである。

○△を付した調値○●●○・●●●○の語例は、各々、[kũkunutsĩ]・[ki:nunał]のみであり、該調値は、いずれも個別的アクセント変化により生じた特異なものと認められる。したがって、表からは除くべきものと思われる。

○上記以外の、|で括られた二つの調値は、「アクセント変化に伴なう、1調類の調値のゆれ」と見なす(この方言では、現在、●●'→○●'ならびに●○→○●のアクセント変化が進みつつあるようである)。

1-4-2 宮古郡下地町上地方言 (2型)

上地方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語例
2	○○ ○● } ●● }	/○○/ /○○' /	ʔusī (牛・押す), ʔaĩ (言う) ʔusī (白), fu'ki (吹く), ʔaĩ (有る)
3	○○○ ○●○ } ●●○ }	/○○○/ /○○'○/	katʃu: (鯉), ʔasĩpi (遊ぶ) pasam (鉄), ʔirabi (選ぶ), tu:ĩ (通る)
4	○○○○ ○●○○ } ●●○○ }	/○○○○/ /○○'○○/	narabi: (並べる), ʔakamunu (赤い) ʔudũrukĩ (驚く), tʃu:munu (強い)

※表中、xを付したのは、調値の上がり目 or 下がり目を担いにくいモーラ。

モーラを分節単位として分析し、 \downarrow で括られた二つの調値を「アクセント変化に伴なう、1調類の調値のゆれ」と見なし、低・降の2調類を認める。

この方言でも、現在、 $\bullet\bullet \rightarrow \circ\bullet$ のアクセント変化が進みつつあるようである。

1-4-3 平良市大浦方言（2型）

大浦方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語例
2	$\left. \begin{array}{c} \circ\bullet \\ \bullet\bullet \end{array} \right\}$	/○○/	$\left\{ \begin{array}{l} \text{?usī} \text{ (牛) など } 1 \cdot 2 \cdot 3 \text{ 類該当の多くの名詞および} \\ \text{sakī} \text{ (咲く) など } 1 \text{ 類動詞該当の大部分} \end{array} \right\}$
	$\bullet\circ$	/○ ^〇 ○/	$\left\{ \begin{array}{l} \text{?usī} \text{ (白) など } 4 \cdot 5 \text{ 類該当の多くの名詞および} \\ \text{sakī} \text{ (裂く) など } 2 \text{ 類動詞該当の大部分} \end{array} \right\}$
3	$\left. \begin{array}{c} \circ\bullet\bullet \\ \bullet\bullet\bullet \end{array} \right\}$	/○○○/	$\eta\text{kad}\bar{\text{z}}\bar{\text{i}}$ (百足), $\text{narab}\bar{\text{i}}$ (並ぶ), mussu (筵), muji (燃える)
	$\left. \begin{array}{c} \circ\circ\circ \\ \bullet\circ\circ \end{array} \right\}$	/○○ ^〇 ○/	$\eta\text{nuts}\bar{\text{i}}$ (命), $\text{?irab}\bar{\text{i}}$ (選ぶ), maffa (枕),
	$\bullet\bullet\circ$		$\text{tu}\bar{\text{i}}$ (通り), na:p (無い)
4	$\left. \begin{array}{c} \circ\bullet\bullet\bullet \\ \bullet\bullet\bullet\bullet \end{array} \right\}$	/○○○○/	?asa:m (浅い), $\text{ka}\bar{\text{i}}\text{kam}$ (軽い)
	$\left. \begin{array}{c} \circ\circ\circ\circ \\ \bullet\bullet\circ\circ \end{array} \right\}$	/○○ ^〇 ○○/	?atsikam (暑い), $\text{ha:s}\bar{\text{i}}\text{k}\bar{\text{i}}$ (歩く), t/u:kam (強い)

※表中、×を付したのは、調値の上がり目 or 下がり目を担いにくいモーラ。

モーラを分節単位として分析し、 \downarrow で括られた二つの調値を「アクセント変化に伴なう、1調類の調値のゆれ」と見なし、昇・降の2調類を認める。

この方言では、現在、 $\bullet\bullet \rightarrow \circ\bullet$ のアクセント変化が進みつつあるようである。また、2モーラ語については、調値・調類の関係に混乱が生じ、次第に1型化への道をたどりつつあるようである。

1-4-4 平良市狩俣方言（2型）

狩俣方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語例
2	○○	/○○/	$\text{?us}\bar{\text{i}}$ (牛), $\text{?a}\bar{\text{i}}$ (言う)
	●○	/○ ^〇 ○/	$\text{?us}\bar{\text{i}}$ (白), $\text{?a}\bar{\text{i}}$ (有る)
3	○○○	/○○○/	?asu : (遊ぶ), ha:n (赤い)
	○●○	/○○ ^〇 ○/	$\text{?ama}\bar{\text{i}}$ (余る)
4	○○○○	/○○○○/	?asa:n (浅い)
	○●●○	/○○○ ^〇 ○/	fuka:n (深い)

モーラを分節単位として分析し、低・降の2調類を認める。

この方言のアクセント体系は、音韻論的にも音声学的にも実に簡素なものである。音韻論的（生成アクセント論的）に基底→音声の実現規則を立てるとすれば、

「低」調：語の全てのモーラを低にせよ。

「降」調：nモーラ語の、末尾より（n-1）番めのモーラから同2番めのモーラまでを高にせよ。

で良い。

1-4-5 宮古郡下地町与那覇方言 (2型)

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例
2	○○	/○○/	ʔusī (牛), kui (杭), kami (亀)
	●●	/ʔ○○/	ʔusī (白), kui (声), kami (蓑)
3	○○○	/○○○/	kiz: (煙), midumu (女), nnutsī (命)
	●●●	/ʔ○○○/	padaka (裸), ʔusui (薬), tarai (盥)

この方言については、報告②にアクセント体系表が示されていないので、ひとまず、筆者が他方言のそれになぞらえて作ったものを掲げる。

この方言には低・高の2調類が認められるが、その調値は、低平・高平という、ごく区別のない二種のもののみである(多モーラ語についても同様。複合語の場合には、高く始まって末尾の下がる調値を取るものが少数認められるようであるが、該調値は高平の特異な変種と見られるもので、アクセント体系の組み立てに変更を来すものではない)。したがって、2型とは云うものの、この方言は、1型アクセントないし無アクセントの方言にごく近づいたものと見るのが当を得ているようである。

なお、この場合、モーラ・シラビームのいずれを分節単位としても分析結果に差は無いが、近隣諸方言との関連を考えて、モーラを単位として置きたいと思う。

1-4-6 平良市池間方言 (2型)

池間方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例
2	○●	/○○ʔ/	ʔusī (牛), matsī (巻く), tui _x (鳥),
	●●		hā _x (葉・歯)
	○○	/○○/	ʔusī (白), matsī (蒔く), tui (取る)
3	○●○	/○○ʔ○/	ʔafudzī (欠伸), ʔasu: (遊ぶ), kju _x sī (煙)
	●●○		
	○○○	/○○○/	dzimidzī (みみず), tanuo (頼む)

※表中、×を付したのは、調値の上がりめ or 下がりめを担いにくいモーラ。

モーラを分節単位として分析し、}で括られた複数の調値を「アクセント変化に伴う、1調類の調値のゆれ」と見なし、降・低の2調類を認める。

この方言でも、現在、●●→○●-ならびに●○→○●のアクセント変化が進みつつあるようである(下記参照)。

2拍名詞注 第2拍が特殊な音環境の場合は \overline{kui} (此), $\overline{hā}$: (葉・歯) のように頭高または高平になる。ただし、助詞が付くアクセント節では $\overline{kui}nu du dzau kai$ (これが良い), $\overline{hā}nu du ʔidiui$ (葉・歯が出ている) のように第2拍だけが高くなるのが普通である。

1-4-7 平良市平良方言 (1型)

平良方言のアクセント体系表

拍	反省的型	音韻論的解釈	語 例
2	○●	/○○ʔ/	$\overline{pā}na$ (鼻・花), $\overline{pā}nanudu$ $\overline{kā}mi$ (亀), $\overline{kā}minudu$ $\overline{ʔi}p$ (犬), $\overline{ʔi}nnudu$

3		/○○○/	$\overline{\text{kat}}\overline{\text{u}}$: (鯉), $\overline{\text{kat}}\overline{\text{u}}\text{:nudu}$ $\overline{\text{fukuru}}$ (袋), $\overline{\text{fukuru}}\text{nudu}$ $\overline{\text{kizsi}}$ (煙), $\overline{\text{kizsi}}\text{nudu}$
4		/○○○○/	$\overline{\text{panatsi}}\overline{\text{si}}$ (鼻血), $\overline{\text{panatsi}}\overline{\text{si}}\text{nudu}$ $\overline{\text{biki}}\overline{\text{dum}}$ (男), $\overline{\text{biki}}\overline{\text{dum}}\text{nudu}$ $\overline{\text{tsu}}\text{:munu}$ (強い), $\overline{\text{jo}}\text{:munu}$ (弱い)

※表中、×を付したのは、調値の上がりめ or 下がりめを担いにくいモーラ。

モーラを分節単位として分析し、↓で括られた複数の調値を「アクセント変化に伴う、1調類の調値のゆれ」と見なし、降の1調類を認める。

この方言では、現在、●●→○●-ならびに●○→●●のアクセント変化が進みつつあるものようである。

2. まとめ

以上の如く、琉球先島諸方言は、無アクセント方言を除きすべて〈n型アクセント体系〉を持つ方言と見なされる（その場合、nは正の整数で $1 \leq n \leq 3$ ）。

これにより、琉球方言の東西両分派に〈n型アクセント〉方言の存することが確認されるわけで、そのAXA型分布と系譜関係の存在とから、なお十分な調査の行なわれていない中央分派についても、〈n型アクセント〉方言の存在する可能性を高く見つめることができる。また、東部分派の残りの諸方言についても、筆者がこれまでに調査した限りでは、やはり〈n型アクセント〉方言である可能性が甚だ高い。

仮に、それらの見通しが正しいとすれば、琉球諸方言は、全て鹿児島方言や長崎方言と同様の〈n型アクセント〉方言として位置づけられるわけで、日本列島の九州西部以西に広範な〈n型アクセント〉方言の分布域が存在することになる。そのことの提出する問題は小さくない。

今後、さらに実地調査と検討を重ねて、その問題に迫りたいと思う。諸賢の御教示を請う。

【補注】 補-1 以上の考察のほとんどは自立語のアクセント（調値・調類）に関するものであり、付属語等のそれについて触れるところは僅かである。これは、その面の研究が従来ほとんど行なわれていなかったことによるものであるが、結果として、先島方言のアクセント体系の記述を不十分ならしめることとなっている。今後、それを明らかにして、さらに十分な記述を試みたいと思うが、手始めに、ここで、上記諸方言の「自立語+主格助詞」のアクセントについて、知り得る限りのデータから記述を加えて置くこととしたい。

琉球先島方言の「自立語+主格助詞」のアクセント・一覧表

方言	助詞	調	値	接続規則
1-2-1	ŋa	○●~○●▶	○●●~○●●▶	高・降には高く、低には低く接続。降の●を●に変える。(最下段()内のものについては、ひとまず考慮に入れない。)
		●●~●●▶	●●●~●●●▶	
		○○~○○▶	○○○~○○○▶	
		○●~○●▶	○●●~○●●▶	
		(●○~●●▶)	(○○○~ ?)	

1-3-1	(n)du	○○~○○▷	○○○~○○○▷▷	○○○○~○○○○▷
		○●~○○▶	○○●~○○○▷▶	○○○●~○○○○▷▶
		●○~(●○▷?)	○●○~○●○▷▷ ~○○○▷▶	○○●○~○○●○▷▷ ~○○○○▷▶ ○●○○~○●○○▷ ~○○○○▷▶
「低・降には低く、昇には高く接続し、昇の語末を低める」のが基本であるが、また、「降にも高く接続し、それ以前を低める」場合がある。				
1-3-2	nu(du)	○●~○●▶▷	○●●~○●●▶▷	nuは、昇には高く、降には低く接続し、降の高部を引き付ける。nuduは、昇には▶▶、降には▶▷の如く接続し、降の高部を引き付ける。
		●○~○●▷	○●○~○●○▷	
		●○~●●▷	●●○~●●○▷	
1-3-3	nu(du)	○○~○○▷▷	○○○~○○○▷▷	○○○○~○○○○▷▷
		○●~○●▷▷	○○●~○○○▷▷	○○○●~○○○○▷▷
全てに低く接続し、昇については、第2モーラ高の調値に変える。				
1-3-4	(nu)	○○~○○▷	○○○~○○○▷	○○○○~○○○○▷
		○●~○○▶	○○●~○○○▶	○○○●~○○○○▶
		低には低く、昇には高く接続し、昇の語末を低める（ただし、昇の2モーラ語に対しては、○●▶の如く接続する場合も有らしい）。		
1-3-5	nu	●○~●○▷	●○○~●○○▷	降には低く、昇には高く接続し、昇を低平の調値に変える。
		○●~○○▶	○○●~○○○▶	
1-3-6	nu	●○~●○▷	?	「全てに低く接続する」か。
		○●~○●▷		
		○○~○○▷		
1-3-7	nu	●○~●●▷	●●○~●●○▷	全てに低く接続する（それ以前の調値に影響を与えないのが原則であるが、例外的に降の2モーラ語については、高部を引き付ける）。
		○●~○●▷	○●○~○●○▷	
		○○~○○▷	○○○~○○○▷	
1-3-8	ndu	●○~●●▷▷	●○○~●●○▷▷	全てに低く接続し、高の●○-を●●-に変える。
		○●~○●▷▷	○●○~○●○▷▷	
		○○~○○▷▷	○○○~○○○▷▷	
1-4-1	nudu	○○~○○▷▷	○○○~○○○▷▷	低には▷▷、降には▶▷の如く接続し、降を第2モーラ以後高（第2モーラの〈独立性〉が乏しいものについては、第1モーラ以後高）の調値に変える。
		●○~○●▶▷	○●○~○●●▶▷	
		●○~●●▶▷	●●○~●●●▶▷	
		○●~○●▶▷		
1-4-2	nudu	○○~○○▷▷	○○○~○○○▷▷	全てに低く接続し、降を第2モーラ以後高（第2モーラの〈独立性〉が乏しいものについては、第1モーラ以後高）の調値にする。
		○●~○●▷▷	○●○~○●●▷▷	
		●●~●●▷▷	●●○~●●●▷▷	

1-4-3	nudu	○●~○●▷▷	○●●~○●●▷▷	全てに低く接続し、それ以前の調値に影響を与えないのが原則であるが、例外的に、降の3モーラ語については、第2モーラ以後高(第2モーラの〈独立性〉が乏しいものについては、第3モーラ高)の調値に変えることが有る。
		●●~●●▷▷	●●●~ ?	
1-4-3	nudu	●○~●○▷▷	○●○~○●○▷▷	
			~○●●▷▷	
1-4-5	nudu	○○~○○▷▷	●●○~●●○▷▷	「低には低く、高には高く接続する」か。
		●●~●●▷▷	?	
1-4-6	nudu	○●~○●▷▷	○●○~○●●▷▷	高には低く接続して第2モーラ以後高の調値に変え、低には高く接続して高平の調値に変える。
		○○~●●▷▷	○○○~●●●▷▷	
1-4-7	nudu	○●~○●▷▷	○●○~○●●▷▷	○●○○~○●○○▷▷
			●●○~●●●▷▷	
低く接続し、3モーラ語については、高部を引き付ける。				

※「方言」の欄に示す数字は、本文の節・項番号である。

※1-4-4については、データが無いので表に掲げなかった。

補-2 なお、1拍名詞相当語についてもほとんど記述を加えなかったが、これは、それらが先島諸方言において引いて発音され、アクセント体系中に2拍名詞としての位置を与えられていることによる。詳しくは、0-2に示した報告①②を参照されたい(1-3-5・1-4-7のそれについては記述が見られないので、なお検討の余地が有る)。